

破鏡と四方転びの箱

破鏡及び鏡片の再集成と馬洗場B遺跡出土例からみえてくるもの

高橋 敏

1 はじめに

1999年、筆者は馬洗場B遺跡の調査主任として発掘調査を担当する機会を得た。遺跡からは上層で平安時代、下層から古墳時代前期の集落と河川跡が確認され、豊富な遺物が出土している。中でも、破鏡と四方転びの箱が出土したことは注目を集めることとなった。いずれも東北では初めての出土であり、日本最北である。弥生時代終末から古墳時代前期へと時代が大きく転換するという、まさに画期となる時に、破鏡が当地へもたらされた意義や伝播ルートの検討は、重要な課題となった。筆者は、報告書執筆の資料を得るべく、全国で出土する破鏡及び鏡片の集成を試み、2003年に(財)山形県埋蔵文化財センター研究紀要創刊号に『「最北の破鏡」鏡片分布から見た古墳出現期の動態(予察)』として発表し、2004年には「馬洗場B遺跡発掘調査報告書」に、若干の改訂を加え考察として掲載している。

本稿は、山形県立博物館平成25年度考古学講座の講師を依頼されたのが契機となった。破鏡をテーマにということで、改めて集成を行い再検討を試みた。その際、前掲拙論「最北の破鏡」(財)山形県埋蔵文化財センター研究紀要創刊号2003と、「四方転びの箱」山形考古(通

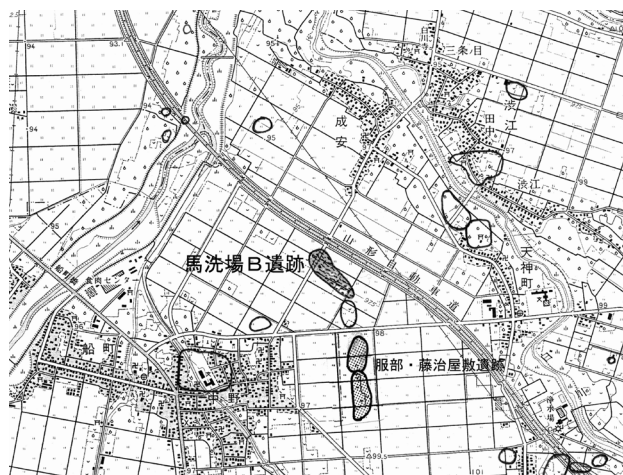


図1 馬洗場B遺跡位置図

巻35号)2005を統合し、再構成したものをレジユメとした。本稿は、そのレジユメを基にしている。

馬洗場B遺跡

馬洗場B遺跡は、山形市の北方、豊かな田園地帯が広がる山形市大字中野に所在する。山形盆地のほぼ中央に位置し、北東には馬見ヶ崎川(白川)が、西には須川が北流し、さらに北には立谷川が西流している。これらの河川は、いずれも奥羽山脈から流れ出ていくつもの扇状地を形成している。山形市は、そのひとつ馬見ヶ崎川扇状地に発達した街である。

馬見ヶ崎川扇状地には放射状に走る旧河道が認められ、それらに沿うように並走する断続的な自然堤防が幾筋も確認することができる。その中の、南北に断続して並ぶ自然堤防の一つに馬洗場B遺跡が立地する(図1)。

馬洗場B遺跡の南0.5kmには、河川跡から多くの土器とともに、おびただしい木製品が出土した服部遺跡・藤治屋敷遺跡がある。木製品の中には、東海系の曲柄鍬や鋤・臼・竪杵・横杵などの農具、機織具、高床建物の梯子、弓、瓢箪なども含まれ、琴柱状木製品や四方転びの箱も認められた。さらに、この河川跡からは赤彩された土器がまとまって出土しており、何らかの祭祀行為が行われたことが推測される。この河川跡は、馬洗場B遺跡の河川跡と検出状況が類似しており、一連のものであった可能性も考えられる。また、馬洗場B遺跡の北方0.5kmには、弥生後期・古墳時代中期の集落遺跡である向河原遺跡や古墳時代前期の渋江遺跡が位置している。この一帯は、山形市内で最も標高が低い地域に連なっており、従来までは、このような低湿地には遺跡が分布しないと捉えられてきた。しかし、近年の東北中央自動車道工事に伴う調査により、弥生時代後期から古墳時代前・中期の遺跡が確認され、その評価や認識を改めさせた。

須川は馬洗場B遺跡の北約2kmで、馬見ヶ崎川(白川)と合流する。また、その北側で立谷川と合流し、馬洗場

B遺跡の北方約4kmで最上川と合流する。このように、馬洗場B遺跡は、主幹河川に複数の地域主要河川が合流するという、古代交通の主要手段の一つであった水上交通の要となる地点に立地していることは、遺跡の性格を考える上で見過ごせない。また、調査原因が山形ジャンクション設置工事であったことは、偶然とはいえ示唆的である。

破鏡の概念

破鏡は文字通り割れた鏡という意味があるが、単なる青銅鏡の破片（以下鏡片）ではなく、人為的に加工が施された鏡片のことを指す。破鏡の概念として本稿では、鏡片の中で破断面または鏡面全体が人為的に研磨され、懸垂用と考えられる穿孔が穿たれているもの、あるいは研磨・穿孔・磨滅痕跡のいずれかが観察されるものを「破鏡」とした。また、報告書や新聞等で「破鏡」と表記されたものは、本稿では破鏡に含めた。穿孔や研磨などが確認されないものは、鏡片として扱う。鏡片とされるものには、甕棺や古墳での盗掘などの外的要因により、完形鏡が破壊され破片となったもの（「破碎鏡」とする）が一定量存在すると思われる。

研究略史

破鏡研究史は、1970年代以降北部九州を中心として研究が進められ、高倉洋彰氏（高倉 1981）、高橋徹氏（高橋 1979）、正岡睦夫氏（正岡 1979）等が優れた論文を發表している。さらに、1980年代以降の出土例の増加に伴って論考も増え、小柳和宏氏、副島邦弘氏、藤丸詔八郎氏、前出高橋徹氏らが報告書中で考察を展開している。その後、檀考研の今尾文昭氏は、破断面の研磨痕跡の詳細な観察を基に、桜井茶臼山古墳での破鏡の存在を明らかにしている（今尾 1993）。1994年前原市で開催された「第35回埋蔵文化財研究集会『倭人と鏡』」は、高倉・高橋両氏の他、森岡秀人氏が破鏡集成とその東伝について論究するなど、「破鏡」研究の一つのピーク・到達点を迎えた。また、西川寿勝氏が意欲的な論考を数多く發表しており、なかでも楽浪郡における小型仿製鏡製作についての論考は、朝鮮半島産銅の使用と関連して興味深いものがある（西川 2003）。下垣仁志氏は古墳時代前期の倭鏡について詳細な分析を行っている（下垣 2003）。

最近では、辻田淳一郎氏が破鏡の伝世などについて多

くの論考を發表している（辻田 2001, 2005）。また、大庭孝夫氏は破鏡に残された工具痕跡から破鏡の生成過程と使用について論究し（大庭 2012）、南健太郎氏は銅鏡の副葬と廃棄を主なテーマとして多くの論考を發表している（南 2008 他）。さらに、青谷上寺地遺跡フォーラム 2012 テキスト中には君嶋俊行氏、岡村秀典氏による集成と論考がある（君島・岡村 2012）。

2 馬洗場 B 遺跡から出土した破鏡

破鏡は、プランを確定できなかった竪穴住居跡の覆土から出土したと判断している。破鏡（写真1・2、図2）は復元径8.2cmを測る内行花文鏡で、1/3強遺存している。平縁・斜行する櫛歯文・3重の重圏文・直行する櫛歯文・内行花文が観察されるが、鈕及び鈕座は欠損している。内行花文は六弧の可能性が高い。破断面及び全体が研磨され1ヶ所に穿孔が観察される。懸垂用と考えられる穿孔は破断面のほぼ中央に穿たれており、シンメト



写真1 馬洗場B遺跡出土破鏡（内行花文鏡）

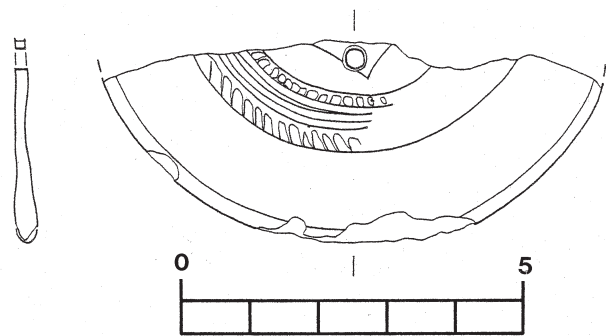


図2 馬洗場B遺跡出土破鏡実測図

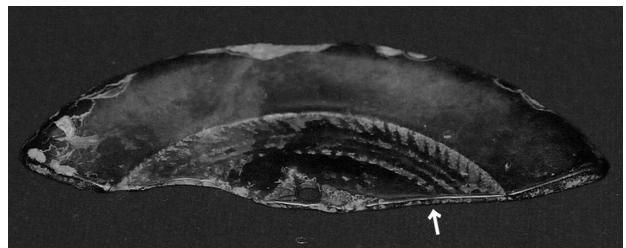


写真2 馬洗場B遺跡出土破鏡破断面タガネ痕跡

リーを意識したと考えられる。穿孔の左側破断面には、タガネ痕跡が連なるのが認められる。形状を整えるための作業痕跡であろう。

破鏡の分布

破鏡は、2014年1月現在、全国で211点確認できた(表1)。また、鏡片は全国で539点の出土であり、破鏡と鏡片の出土総数は750点を数える。前回の集成では破鏡は161点、鏡片518点となっているのに比して、破鏡では50点、鏡片では21点増加している。

先学の論考にあるように、福岡県・大分県・佐賀県の北部九州地方に分布の中心があり、中国・近畿・東海と東漸するに従って希薄となる。長崎県・宮崎県・鹿児島県などの南部九州地方では、破鏡はもとより鏡片の確認例が少ない。あわせて、対馬での破鏡の発見例が皆無となっていることは、伝播ルートや受容した勢力を考察する上で興味深い現象である。

関東では千葉県及び神奈川県の大東京湾岸地域に偏在しているが、近年、群馬県高崎市周辺や栃木県真岡市でも

確認されている。いわゆる「毛野国」の地域であり、何らかの関連も想起させる。日本海側の佐渡、北限となる山形市の本例は、分布域の縁辺というべき地域であり、その意味する所の問題が大きいと考えられる。

分布の中心をなす北部九州を詳細にみると、4つの地域に細分することが可能である。福岡市・前原市などの玄界灘に面した一帯、吉野ヶ里遺跡がある吉野ヶ里町・神崎市・小郡市など筑後川中流域、熊本県菊池川流域、大分県竹田市を中心とする大野川中上流域、同県宇佐市を中心とする駅館川中上流域などである。中国四国近畿では、広島県福山市を中心とする芦田川中流域、岡山市周辺、鳥取県鳥取市周辺、愛媛県松山市周辺、高知県南国市・高知市などの高知平野一帯、香川県観音寺市・善通寺市一帯、神戸市・大阪市など大阪湾に面した一帯・滋賀県琵琶湖東岸などが指摘できる。一方、東海では愛知県清須市・名古屋市の庄内川流域、北陸では石川県金沢市犀川下流域で複数確認されるのみで、面的ではなく点的な分布といえる。(図3) その中で、福島県の会津

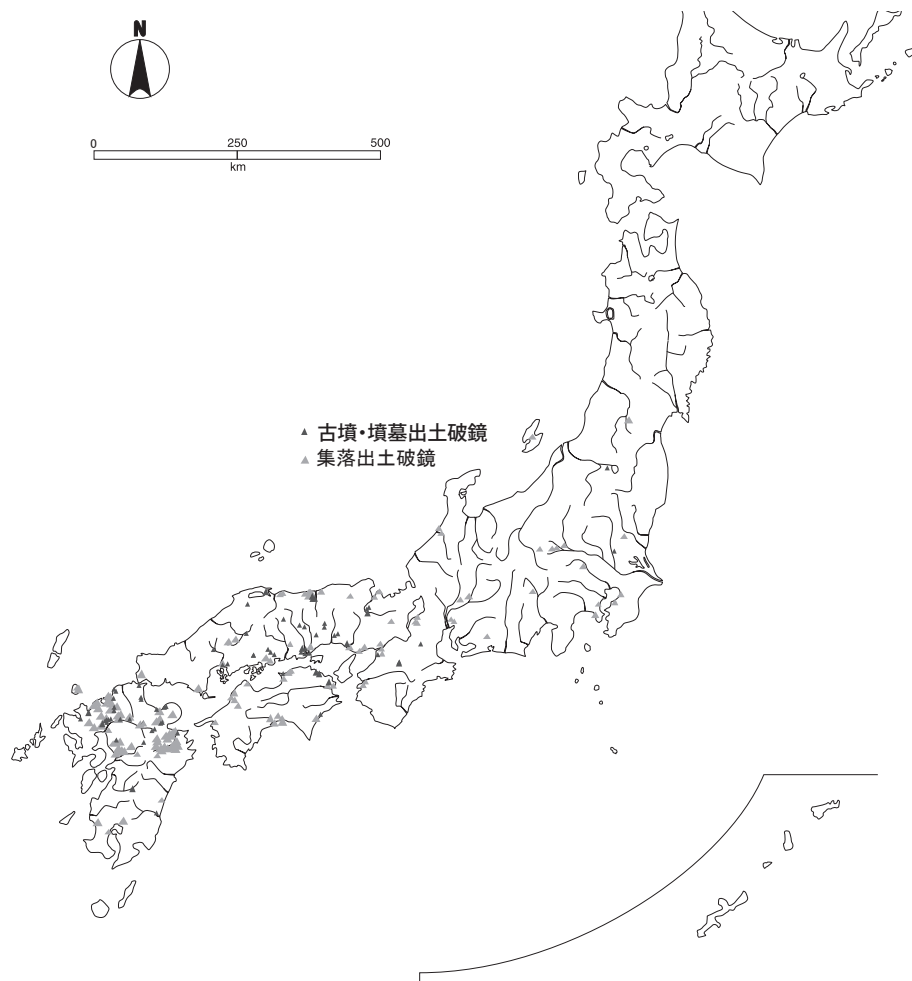


図3 墳墓・古墳、集落遺跡 破鏡出土分布図

田村山古墳と茨城県林愛宕塚古墳例は特異である。

破鏡の出土遺跡

破鏡を出土遺跡から見ると、集落・祭祀遺跡から出土したものが63%、墳墓・古墳から出土したもの(不明含)37%と、集落・祭祀遺跡出土が卓越している。出土遺構ごとでは、竪穴住居などの住居跡からの出土が60点を数え、集落・祭祀遺跡出土の45.8%、破鏡全体の28.4%を占める。次いで溝跡・河川からの出土が26点、集落・祭祀遺跡出土の19.8%、破鏡全体では12.3%を占めている。また、墳墓・古墳から出土する破鏡では、木棺からの出土が19点を数え、墳墓・古墳出土の23.8%、破鏡全体では9%を占める。土器棺出土は4点で、他は主体部の埋葬施設からの出土が多くなっている。

分布傾向は、集落・祭祀遺跡出土破鏡が集落・祭祀遺跡出土鏡片の分布とほぼ一致する一方で、墳墓・古墳出土とは明確な違いが読みとれた。北部九州では玄界灘に面した一帯が中心となるのは同様で、次いで大分県玖珠

川上流域と周防灘に面した地域に大きなまとまりがある。他では岡山県岡山市と広島県福山市を中心とするやや広い地域、大阪府淀川下流域に分布するが、近畿以東では極めて少ない。破鏡を墓に入れる行為が伝わらなかったのか、意識的に避けたのか、興味深い。

鏡片の分布と出土遺構

集落・祭祀遺跡から出土した鏡片は、鏡片全体の23%である。分布域は、前述したように、集落・祭祀遺跡から出土する破鏡の分布域とほぼ一致している。(図4) このことから、これら集落・祭祀遺跡から出土する鏡片は、集落・祭祀遺跡から出土する破鏡とほぼ同様の位置づけ、あるいは役割が付与されていたと考えることができそうである。さらに、詳細な観察により研磨痕跡が認められれば、破鏡に組み入れることも可能となる。

墳墓・古墳出土鏡片は77%を占める。分布の中心となる北部九州の墳墓(甕棺)出土鏡片は、須玖岡本遺跡・井原鍵溝遺跡・三雲遺跡・原の辻遺跡など拠点遺跡から



図4 墳墓・古墳、集落遺跡 鏡片出土分布図

集中して出土しており、奴国・伊都国・末慮国・一支国など、いわゆる「魏志倭人伝」にみえる主要なクニグニからの出土となっている。破鏡が集落から多く出土する大分県の大野川中上流域や駅館川中上流域などでは鏡片が出土しないのは注目される。それ以外の地域では、瀬戸内海沿岸地域と大阪府・奈良県北部・京都府南部に集中域が見られる。しかし、これらの鏡片は古墳時代前期から中期の古墳や墳墓からの出土であり、時期がやや新しくなるものが多く、北部九州における鏡片の位置づけとは異なると想定される(図8)。

出土遺構ごとでは、竪穴住居跡などからの出土が40点を数え、集落・祭祀遺跡から出土する鏡片の31.5%、鏡片全体の7.4%を占める。次いで溝跡・河川からの出土が20点、集落・祭祀遺跡出土の15.7%、鏡片全体では3.7%を占めている。また、墳墓・古墳から出土する鏡片では、木棺からの出土が44点を数え、墳墓・古墳出土鏡片の10.7%、鏡片全体では8.2%を占める。土器棺出土は71点を数え、墳墓・古墳出土の17.2%、鏡片全体では13.2%を占める。他は主体部の埋葬施設からの出土が多い。前述したが、集落・祭祀遺跡から出土する鏡片と破鏡は、位置づけや役割がほぼ共通していた可能性がある(図7)。

破鏡・鏡片の出土時期

破鏡・鏡片の出土遺構の時期については、引用した各文献の記載に従っている。

集落・祭祀遺跡から出土した破鏡は、流れ込みや伝世によって古墳前期の破鏡が平安時代の竪穴住居跡から出土した埼玉県の例以外は、概ね弥生V期を中心としており、いわゆる弥生庄内併行期におさまっている。従って地域による時期差はほとんど無いことが理解される。一方、墳墓・古墳から出土した破鏡は地域間での時間差が窺え、北部九州では概ね弥生V期～庄内併行期を中心とするのに対して、それ以外の地域では古墳前期が中心となっている。

集落・祭祀遺跡から出土した鏡片は、九州と四国では弥生IV期～V期を中心とするのに対して、それ以外の地域では弥生V期～古墳前期と、やや新しくなるようである。一方、墳墓・古墳から出土したものは、遺跡の種類や地域による時期差が明瞭である。遺跡的には、古墳及び祭祀遺跡では地域差による先後関係は窺えず、概ね古

墳前期～中期を中心とするのに対して、墳墓ではほとんどが北部九州に存在し、甕棺が弥生III期～IV期、箱式石棺や組合せ式木棺などが弥生IV期～V期となっている。

小結

馬洗場B遺跡での破鏡出土を契機として、その位置づけあるいは役割、時期などについて、浅学ながら検討を加えてきた。しかし、いまだに製作地はおろか波及ルートすら結論を見いだせていないのが現状である。

馬洗場B遺跡出土破鏡は、鏡式でいえば内行花文鏡である。東京文化財研究所平尾良光氏(当時)による鉛同位体産地同定では、細形銅剣や多鈕細文鏡などと同じ朝鮮半島産の銅という結果を得ている。東京の車崎正彦氏や奈良の樋口隆康氏は本破鏡を実見した際、前漢鏡をモデルとした仿製鏡との理解であった。一方、大分県の高橋徹氏や九州の研究者は、遺存状態と銅質や鍍あがりの良さから、北部九州地域で出土する破鏡と同時期の、舶載鏡との認識であった。大分県内や吉野ヶ里遺跡、滋賀県斗西遺跡、愛知県朝日遺跡などの舶載鏡製破鏡を実見する機会を得て、筆者は馬洗場B遺跡の破鏡も舶載鏡製と考えている。時期については、馬洗場B遺跡の竪穴住居跡に廃棄されたのは古墳時代初頭であり、降っても古墳時代前期前半と考えている。

これまでの雑駁な検討をもとに、大まかにまとめてみることにする。

まず、鏡片が出現する。弥生III期からIV期頃に、「魏志倭人伝」にみられる奴国や伊都国、一支国など北部九州の玄界灘に面する拠点遺跡(クニ?)で、鏡片が甕棺に副葬されるようになる。また、特定墳墓に集中する場合が見られる。その後、弥生IV期からV期頃、鏡片は北部九州から対馬海流に乗り鳥取県青谷上寺地遺跡へ伝わり、同時に中国・四国地方の瀬戸内海沿岸部と吉備地方・大阪府淀川下流域に拡がるようになる。もたらされた鏡片は墳墓に埋納されるようになるが、淀川水系周辺では集落内の竪穴住居内や溝・河川などに、廃棄される現象も見られるようになっていく。

弥生V期から弥生庄内併行期になると、穿孔や破断面が研磨された破鏡が、北部九州の大分県大野川中下流域の集落に出現し周辺地域に拡散する。集落から出土する破鏡は、同じく集落から出土する鏡片と分布域がほぼ一致しているが、中心域は大分県大野川中下流域・博多湾

沿岸・佐賀県吉野ヶ里周辺・熊本県菊池川流域である。この地域では、弥生後期から散発的に墳墓や古墳に副葬されるのが見られる。ほぼ同時期には瀬戸内海沿岸部を経由して大阪府淀川流域に至り、淀川水系を遡って濃尾平野へと至り、愛知県庄内川下流域にも波及する。さらに、中山道ルートで長野県・山梨県を経て東京湾の内房地方に伝わる。内房には愛知県から海路で直接伝わったことも考えられる。内房から荒川や利根川を遡って群馬県・栃木県に波及したのであろう。日本海側では、北部九州から鳥取・石川・佐渡と点的ではあるが拡がりを見せ、弥生終末期から古墳前期初頭には山形県馬洗場B遺跡でもみられることになる。これらの破鏡は、主に集落内の竪穴住居内や溝・河川などに廃棄される。破鏡とその集落内への廃棄という行為は、比較的短期間で、佐渡・山形へ波及している。

古墳前期を中心とする頃、吉備地方の古墳の多くに破鏡が副葬されるようになる。また、東京湾岸と利根川下流域の集落で鏡片と破鏡が竪穴住居や溝に廃棄される。破鏡は、古墳時代前期後半にはその役目を終え集落内から姿を消す。一部では古墳時代中期まで伝世する例もあるが、一般的ではない。しかし、古墳時代後期まで鏡片は量的には少なくなるが、各地の古墳に副葬される例が散見される。

そういったなかで、山形県川前2遺跡と大阪府高木遺跡で、ともに奈良時代の遺構(川前2遺跡は竪穴住居内)から、海獣葡萄鏡片が出土している。鏡に対する意識や破鏡・鏡片の使用と廃棄、さらには破片祭祀を考えるうえで、大変興味深い事例である。

課題としては、破鏡・鏡片がどのような形でもたらされたかがある。鏡片として舶載されたという考え方と、完形鏡として舶載された後、何らかの理由により分割され、鏡片あるいは破鏡として波及したという考え方があ



写真3 川前2遺跡出土 海獣葡萄鏡

り、結論はいまだ出ていない。

さらに、破鏡と鏡片の位置づけと役割についてである。時期・地域により位置づけが異なっているようである。当初の権威の象徴・威儀具としての存在から、祭祀具・ツールへと変化し、集団あるいは地域祭祀の変化とともに集落内に廃棄されていったのか。集落内祭祀及び墳墓・古墳での墓前祭祀の波及と、その受容と変化など課題とすべき事柄は多い。また、三角縁神獸鏡や定型的な大型前方後円墳が分布する地域には、破鏡がさほど見られないように思えることと、大型完形鏡との関係などについても大きな問題となろう。

3 四方転びの箱

馬洗場B遺跡には、最北の破鏡の他にもう一つ最北の出土となる遺物が存在する。四方転びの箱といわれる木製品である。南約500mに位置する藤治屋敷遺跡からも、やや小ぶりで調整は若干粗雑な印象を受けるが、四方転びの箱が出土している。

四方転びの箱は、通常4枚の台形の側板が組み合わさったときに、内側に傾斜する(転ぶ)ことから四方転びと呼び習わされる。形状は、四角錐の上部を水平に切り取ったような形状であり、「箱めがね」や「漏斗」にも似ている。また、朝鮮半島の民具例の灌漑用具に全体の形状が似ているともいわれている。

四方転びの箱は指物で、規矩術を用いているといわれている。規矩術は、日本古来の伝統木工技法ではなく、

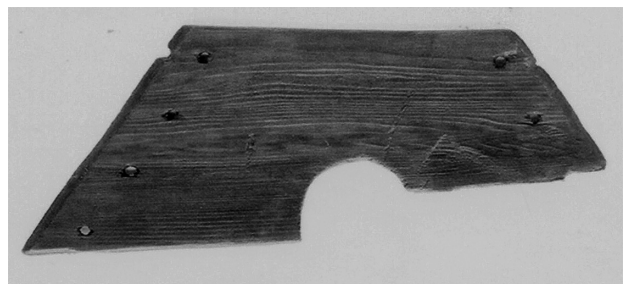


写真4 馬洗場B遺跡出土 四方転びの箱(上:外面・下:内面)

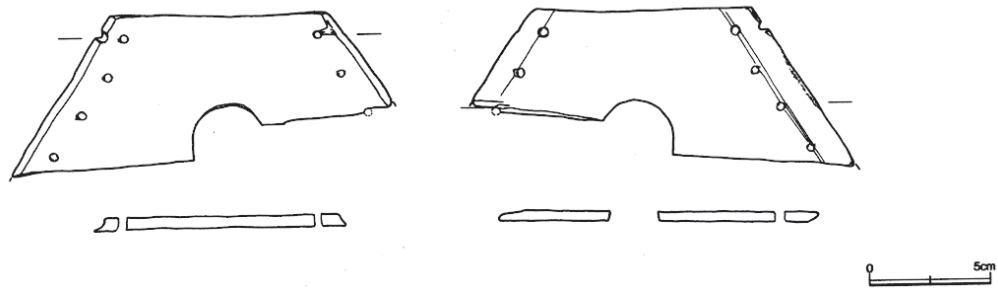


図5 馬洗場B遺跡出土 四方転びの箱 実測図

朝鮮半島から伝来したものと考えられている。四方転びの箱は規矩術の初歩とされ、大工の棟梁が弟子に曲尺(サシガネ)の使用法(規矩術の腕試し)を習得させるために作らせたという。かつて多くの家庭にあった台形の踏み台や屑箱は、新築記念に棟梁が弟子に腕試しとして作らせ、置き土産にしたとのことである。このことを裏付けるように、山形県職業能力開発協会の山口宏二氏によれば、現在も建築士の技能検定実技試験課題に四方転びが出題される場合があるということであった。

研究略史

四方転びの箱に関する研究は、出土例の少なさに比例するのか極めて少ない。上原真人氏が1993年に木工技術史から論及したのが嚆矢となる。上原氏以前は、箱状品や方錘台形木製品をはじめ様々に呼称されていた。続いて仁木昭夫氏は1996年に下田遺跡報告書中で、出土した四方転びの箱に関連して詳細な分析と集成を行い、編年案を提示している。さらに、村上年生氏も1997年と2002年に、下田遺跡で出土した四方転びの箱に関連して、指物技術の伝来と曲尺との関連を絡めて論考を発表している。また、1997年には(財)大阪府文化財調査研究センターの特別展図録中で、仁木昭夫氏により取り上げられ、1998年には(財)三重県埋蔵文化財センターの、第18回三重県埋蔵文化財展図録で、近畿地方

で出土している四方転びの箱が紹介されている。

最近では、2007年に野田昌夫氏が古代学研究の中で、下田遺跡例を基に復元し使用実験を行い、箱メガネとの見解を出している。また、2013年には、浦蓉子氏が立命館大学考古学論集の中で、全国の集成を行っている。そのなかで浦氏は、法量の分析と分類を行い、紐結合技術から機能や用途、伝播ルートなどについて論究している。

呼称について

四方転びの箱という呼称であるが、4枚の側板で構成され、箱型を呈することから四方転びの箱と呼称されてきたが、底板や蓋が付属するものは現時点では確認されていない。このため、箱という名称はふさわしくないという見解もある。このため、前出の浦氏は「四方転び木製品」と呼称しており、同様に、四方転び木製品とする研究者も多い。本稿では従来の四方転びの箱と呼称することにする。

なお、後掲する四方転びの箱出土分布図は、浦蓉子氏が作成した集成表を基に、青谷上寺地遺跡を加えて、筆者が作成した(図13)。

出土例

四方転びの箱は全国的に出土例が少なく、これまでに知られる例は25遺跡64点に過ぎない。大阪府では下

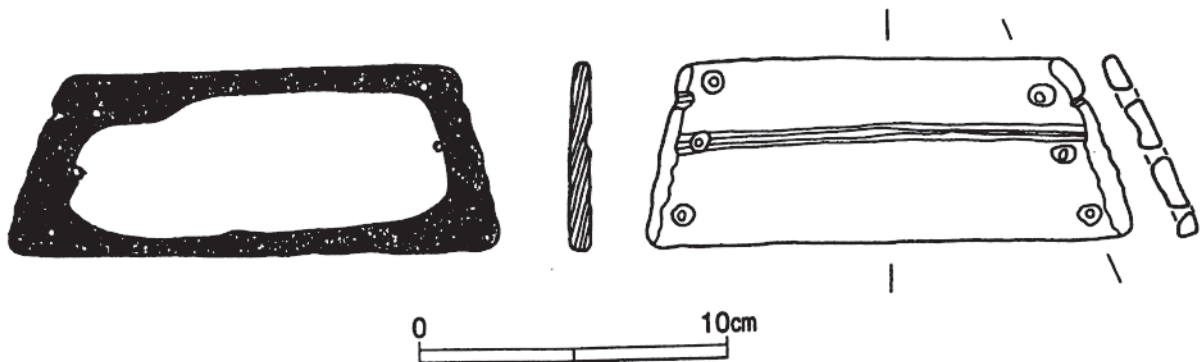


図6 藤治屋敷遺跡出土 四方転びの箱 実測図

田遺跡など4遺跡、滋賀県では斗西遺跡など8遺跡、三重県では北堀池遺跡、六六A遺跡、奈良県では布留遺跡・平城京下層、鳥取県では青谷上寺地遺跡、山形県では馬洗場B遺跡・藤治屋敷遺跡であり、近畿地方を中心としている。近年では、石川県や新潟県、埼玉県でも確認されており、分布域を拡大している。大阪府下田遺跡からは14点(内4点は同一個体)が溝からまとまって出土しており、特異である。この溝からは剣形や刀形木製品、さらには舟形木製品等の祭祀具がまとまって出土し、琴も出土したことが報告されている。また、弥生時代後半の大規模集落遺跡で、弥生時代人の脳が出土して注目を集めた鳥取県青谷上寺地遺跡では、河川跡から琴とともに四方転びの箱や紐結合の箱?が出土している。時期は、弥生時代後半から古墳時代前期を中心とするが、一部は古墳時代中期前半に降るものもあるとされている。いずれの遺跡も古代の主要交通路である河川の流域や湖沼・海岸に面し、拠点集落とされる。(図13)

馬洗場B遺跡出土の四方転びの箱

四方転びの箱は、河川跡で確認された木組み遺構付近からの出土である。時期は、古墳時代前期初頭を降らないと判断される。木組み遺構下層出土の土器は薄手で、竪穴住居や河川跡の主体となる土器群に比べ古い印象を受ける。河川跡出土土器の一部は、AMS法によるC14年代測定によれば、1710～20±30の測定値であり、四方転びの箱は、これらの土器群にやや先行すると推測される。本来は4枚1組となるが、1枚のみの出土である。下部の一部が欠損している。残念ながら発掘調査中に欠損した可能性が高い。

板材は、台形を呈する厚さ約4mmの杉の柾目材である。丁寧な調整で、表面は滑らかに仕上げられている。上辺は9cmを測る。両斜辺は内側が面取りされており、一方の斜辺の上端から1cmの部分には、小さい挟りが入れている。外側となる面には、斜辺から1cmの所に罫引き線が左に1本、右に2～3本入れられている。この罫引き線に沿って、上辺から1cmのところから2cm間隔で、直径3mmほどの小孔が穿たれている。さらに、中央部に上辺から3.7cmのところから、幅4cmほどのアーチ状の挟りが観察されるが、本来は長楕円形の孔であろうと考えている。本来は、同様の台形を呈する板材が他に3枚存在し、合わせて4枚で一組を構成したも

のであろう。大阪府下田遺跡例と同様に、一枚板から木取りされたと考えられる。

馬洗場B遺跡出土の四方転びの箱は、完形ではないものの薄い板材を使用し、面取りや表面の仕上げが極めて丁寧である。現在までに確認されている四方転びの箱の中でも、製材から仕上げまで極めて優れたものといえる。また、杉の柾目材を使用していること、罫引き線が引かれ、桜樺皮紐により綴じ合わされることなど、技法的にも先の北堀池遺跡例と同じである。さらに、大阪府下田遺跡出土の四方転びの箱の綴じ孔は斜辺から約1cmで各綴じ孔の間隔は約2cmと、馬洗場B遺跡出土の四方転びの箱と同じであった。これらのことから、在地産ではなく搬入品の可能性が高いと考えられる。

近接する藤治屋敷遺跡出土の四方転びの箱は報告書によれば、厚さ8mmの杉の板目材で、やや厚ぼったい印象である。上辺は12.4cm、下辺は15.6cmを測る。外側となる面を基準として左斜辺は6cm、右斜辺は5.8cmを測り、やや不均整な台形を呈する。左右斜辺の上端から1cmの部分には、馬洗場B遺跡例と同様に、小さい挟りが入れている。桜樺皮紐で十字に結び合わされたものであろう。また、左斜辺から1.5cm左上辺から1cm、右斜辺1.2cm右上辺8mmのところから、それぞれ約2cm間隔で、直径5mmほどの小孔が3つずつ穿たれている。中央部には孔は存在しないが、内面側の中央上よりにU字状の溝が1条入る。板材がはめ込まれていた可能性も考えられる。

小結

用途については、前述したように野田昌夫氏は、大阪府下田遺跡例を復元し、水中を覗きこむ実験を行っている。その結果、牡蠣やアワビなどを取る箱メガネとして使用も可能としている(野田2007)。また、浦蓉子氏は、表面に残された罫引き線などから精製品ではないとして、漉し器の可能性を示唆している(浦2013)。しかし、多くの四方転びの箱の出土地点は、馬洗場B遺跡を含め溝や河川である。河川には箱メガネまで使用して採取すべき貝類はきわめて少ないことから、箱メガネではないと判断される。杉の柾目材を薄く丁寧に製材し、精緻に組み上げていることから、祭祀に使用したのと考えられるのである。三方に似た使用形態ではないかと考えている。

4 まとめにかえて

破鏡と近畿地方を中心に分布する四方転びの箱が、どういう経緯とルートで山形に伝わったのであろうか。

破鏡は、在地首長や巫女の権威の象徴としての威儀具、あるいはムラにおける祭祀で使用した祭祀具とされる。四方転びの箱も河川や農耕・集落に関わる祭祀具の一つと考えられる。

四方転びの箱と破鏡が同じ遺跡から出土している例は、滋賀県東近江市斗西遺跡と鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡、そして馬洗場B遺跡の3遺跡のみである。北部九州から瀬戸内海や日本海を経てもたらされた破鏡と、琵琶湖を経て内海であった日本海へ出た四方転びの箱が、一方は西進し青谷上寺地遺跡へ到達。もう一方は「越」へと至り、さらに北上して、最上川を遡り馬洗場B遺跡へと伝えられたのであろうか。赤塚次郎氏が「東海系のトレース」(赤塚 1992) でいう、3世紀中頃に大きな動きを見せた伊勢湾岸社会のうねり(S字甕を中心とする第2次拡散期)が、東北山形に波及したことにも関連しているのかもしれない。

破鏡と四方転びの箱の分布を概観すると、出雲・越・大和・狗奴など、この時期既に強固な地方政治集団として存在していた集団の、縁辺にいたであろう中小集団が浮かび上がってくる。自らの生き残りをかけ、鉄などの資

源や最新の技術を求めて、ネットワークを拡大していったのではないだろうか。

さらに、時代はやや降るが、山形県南陽市に所在する百刈田遺跡の、古墳中期の河川跡から筑状木製品が出土している。古代中国の筑という弦楽器に形状が似るとされており、全国でも出土例が少なく、17遺跡20点の出土にすぎない。百刈田遺跡例が最北の出土という。主要な時期は古墳時代前期～中期で、分布域は四方転びの箱にやや類似するように思われる(図13)。山形県天童市板橋2遺跡から出土した最北の石釧片とあわせ、興味深い。当該時期の人の動きと土器・土器様式の動き・伝播に関して、何らかの示唆を与えてくれるものであろう(図14)。

破鏡・鏡片の出土遺跡や出土数等は、2014年1月までの再集成を試みた数値である。

本稿を執筆するにあたって、高桑弘美氏には資料の提供と多大な教示と励ましをいただいた。記して感謝申し上げる。
(2014年3月31日脱稿)

※本校最終校正中、宮城県栗原市入の沢遺跡の古墳時代前期の竪穴住居3棟内から、3面の銅鏡出土の報道があった。2面は珠文鏡で、1面は内行花文鏡片(復元径9cm)という。破鏡の可能性が高く、興味深い。(2014.12.06)



写真5 馬洗場B遺跡出土 四方転びの箱(復原品)と破鏡

引用・参考文献

赤塚次郎 1992 「東海系のトレース」『古代文化』財団法人古代学協会

荒山千恵 2005 「筑形木製品の研究」『北海道大学大学院文学研究科研究論集第5号』北海道大学大学院文学研究科

荒山千恵 2009 「国際音楽考古学会第6回シンポジウムと「音楽考古学」」『北海道民族学第5号』北海道民族学会

伊藤律子 2004 「筑状弦楽器 - 木製と土製による形態の特徴 -」『静岡県考古学研究 36』静岡県考古学会

今尾文昭 1993 「桜井茶白山古墳出土大型仿製内行花文鏡の破鏡の可能性について」『考古学論叢第17冊』奈良県立橿原考古学研究所

上原真人 1993 「四方転びの箱 - 古代木工技術の変革（予察）」『平安京歴史研究 杉山信三先生米寿記念論集』杉山信三先生米寿記念論集刊行会

浦 蓉子 2013 「結合技術からみた四方転び木製品」『立命館大学考古学論集 VI』立命館大学

大阪府近つ飛鳥博物館 2005 「遙かなり 音の道」『平成17年度春季特別展図録』大阪府立近つ飛鳥博物館

大阪府立弥生文化博物館 1993 「弥生人の見た楽浪文化」『秋季特別展図録』大阪府立弥生文化博物館

大庭孝夫 2012 「破鏡にみられる工具痕 福岡県みやま市藤の尾垣添遺跡出土破鏡の観察から」『九州歴史資料館研究論集37』九州歴史資料館

岡村秀典 2012 「鏡から見た漢と倭の交流 海を渡った鏡と鉄」『青谷上寺地遺跡フォーラム2012』鳥取県埋蔵文化財センター

賀川光夫 1992 「再生鏡の分配と弥生後期の社会」『史学論集22』別府大学史学研究会

北九州市考古博物館 1991 「弥生古鏡を掘る - 北九州の国々と文化 -」『特別展図録』北九州市考古博物館

君嶋俊行 2012 「青谷上寺地遺跡の鏡 海を渡った鏡と鉄」『青谷上寺地遺跡フォーラム2012』鳥取県埋蔵文化財センター

国立歴史民俗博物館 1994 「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』国立歴史民俗博物館

国立歴史民俗博物館 2002 「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成補遺1」『弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成補遺1』国立歴史民俗博物館

小林圭一 2011 『川前2遺跡第1・2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第193集

財団法人大阪府文化財センター 2003 「古墳出現期の土師器と実年代」『シンポジウム資料集』財団法人大阪府文化財センター

財団法人大阪府文化財調査研究センター 1997 「大陸文化へのまなざし」『特別展図録』財団法人大阪府文化財調査研究センター

笹原 潔 2005 「出土琴と筑状弦楽器の研究」大阪芸術大学大学院芸術研究科

滋賀県立安土城考古博物館 2005 「王権と木製威儀具 - 華麗なる古代木匠の世界 -」『平成17年度春季特別展図録』滋賀県立安土城考古博物館

下垣仁志 2003 「古墳時代前期倭鏡の流通」『古文化談叢第50集』九州古文化研究会

下垣仁志 2003 「古墳時代前期の倭鏡の編年」『古文化談叢第49集』九州古文化研究会

高倉洋彰 1981 「弥生時代副葬遺物の性格」『弥生時代社会の研究』寧楽社

高橋 敏 2003 「最北の破鏡 - 鏡片分布から見た古墳出現期の動態（予察）-」『研究紀要創刊号』財団法人山形県埋蔵文化財センター

高橋 敏 2005 「四方転びの箱 - 山形市馬洗場B遺跡出土例から見えてくるもの -」『山形考古第8巻第1号（通巻35）』山形考古学会

高橋 敏 2004 『馬洗場B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第123集

高橋 徹 1979 「廃棄された鏡片 - 豊後における弥生時代の終焉 -」『古文化談叢第6集』九州古文化研究会

高橋 徹 1986 「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学第60号』九州考古学会

高橋幸治 2010 「集落関連遺跡出土の腕輪形・宝器類石製品集成

表』『古代学研究187』古代学研究会

辻田淳一郎 2001 「古墳時代開始期における中国鏡の流通形態とその画期」『古文化談叢第46集』九州古文化研究会

辻田淳一郎 2005 「破鏡の伝世と副葬 - 穿孔事例の観察から -」『史淵142』九州大学

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1992 「大和の古墳の鏡」『奈良県立橿原考古学研究所附属博物館考古資料集第1冊』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

仁木昭夫 1996 「出土した「四方転びの箱」」『下田遺跡』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集

西川寿勝 1996 「卑弥呼をうつした鏡」『卑弥呼をうつした鏡』北九州中国書店

西川寿勝 2003 「鏡にうつしだされた東アジアと日本」『鏡にうつしだされた東アジアと日本』ミネルヴァ書房

西川寿勝 1999 「三角縁神獣鏡と卑弥呼の鏡」『日本考古学第8号』日本考古学協会

西川寿勝 2000 「2000年前の舶載鏡 - 異体字銘帯鏡と弥生の王 -」『日本考古学第10号』日本考古学協会

野田昌夫 2007 「「四方転び木製品」の用途について」『古代学研究178』古代学研究会

林 正憲 2000 「古墳時代前期における倭鏡の製作」『考古学雑誌第85巻第4号』日本考古学会

肥後考古学会 2001 「考古学ジャーナルNO470 青銅器の分析科学と産地問題」『肥後考古第3号』肥後考古学会

比田井克仁 2001 「関東における古墳出現期の変容」『関東における古墳出現期の変容』雄山閣

藤丸昭一郎 2000 「後漢鏡について」『古墳発生期前後の社会像』九州古文化研究会

埋蔵文化研究会 1994 「倭人と鏡 - 日本出土中国鏡の諸問題」『倭人と鏡 - 日本出土中国鏡の諸問題』埋蔵文化財研究会

正岡睦夫 1979 「鏡片副葬について」『古代学研究90』古代学研究会

松山市考古館 2002 「伊予の鏡 - 鏡に映しだされた古代伊予」『特別展図録』松山市考古館

三重県埋蔵文化財センター 1998 「考古学から見た三重の木文化」『第18回三重県埋蔵文化財展図録』三重県埋蔵文化財センター

南健太郎 2008 「弥生時代九州における銅鏡の副葬と廃棄」『熊本大学社会文化研究6』熊本大学

村上年生 1997 「四方転びの箱の木工技術的検討（資料編）」『大阪文化財研究第12号』財団法人大阪府文化財調査研究センター

村上年生 2002 「四方転びの木工技術的検討」『大阪文化財論集II』財団法人大阪府文化財調査研究センター

森 泰道 1996 「台付甕の誕生と消長」『考古学ジャーナル10月臨時増刊号』ニューサイエンス社

山口 均 2000 「出土琴にみる地域的諸相」『都城12』財団法人向日市埋蔵文化財センター

山越 茂 1994 「関東地方舶載内行花文鏡私論」『研究紀要第2号』財団法人栃木県文化振興財団埋蔵文化財センター

雄山閣 1993 「特集鏡の語る古代史」『季刊考古学第43号』雄山閣

新井 宏 2001 「鉛同位体比による青銅器の鉛産地推定をめぐって」『邪馬台国74号』梓書院

肥後考古学会 1983 「肥後古鏡聚英」『肥後考古第3号』肥後考古学会

平尾良光・鈴木浩子 1999 「鉛同位体比から見た古代日本の青銅器」『ぶんせき』社団法人日本分析化学会

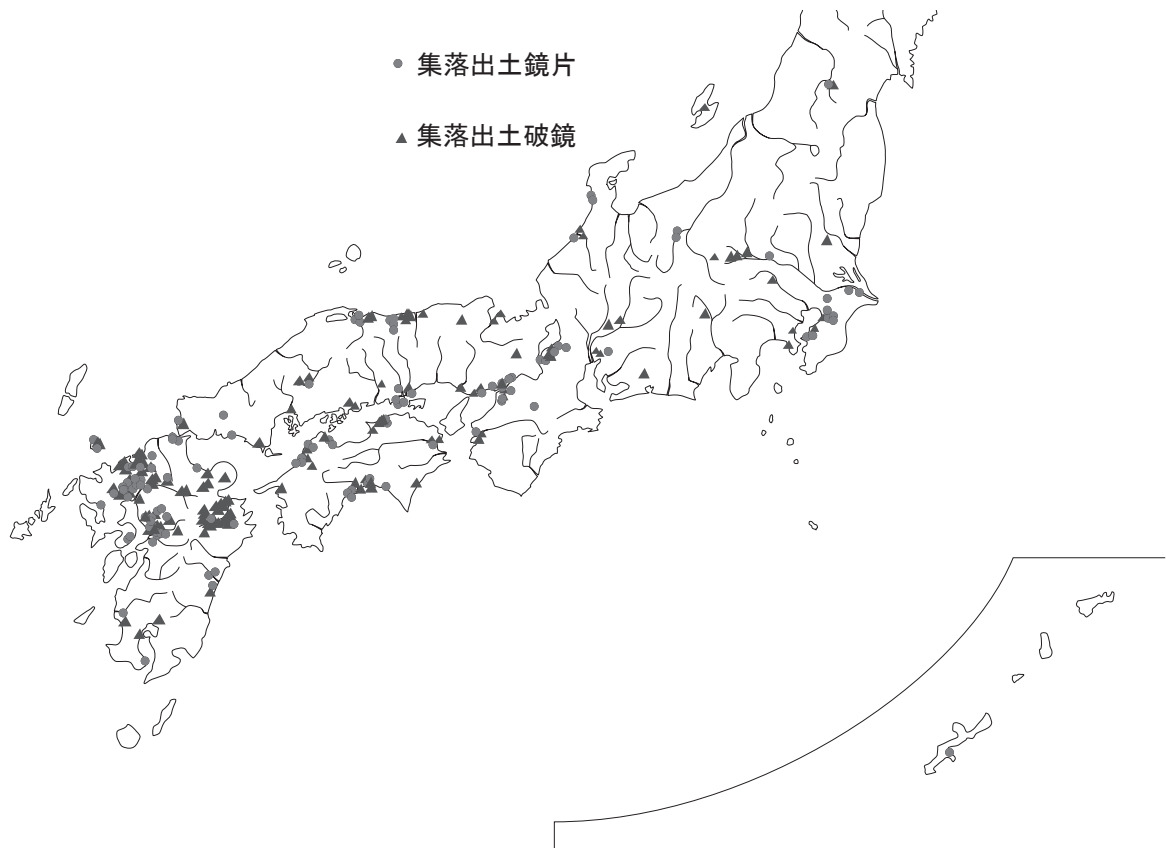


図7 集落遺跡出土 鏡片・破鏡分布図



図8 墳墓・古墳出土 鏡片・破鏡分布図



図9 集落遺跡出土 破鏡分布図



図10 古墳・墳墓出土 破鏡分布図



図11 集落遺跡出土 鏡片分布図



図12 墳墓・古墳出土 鏡片分布図



図 13 四方転びの箱・筑形木製品出土分布図

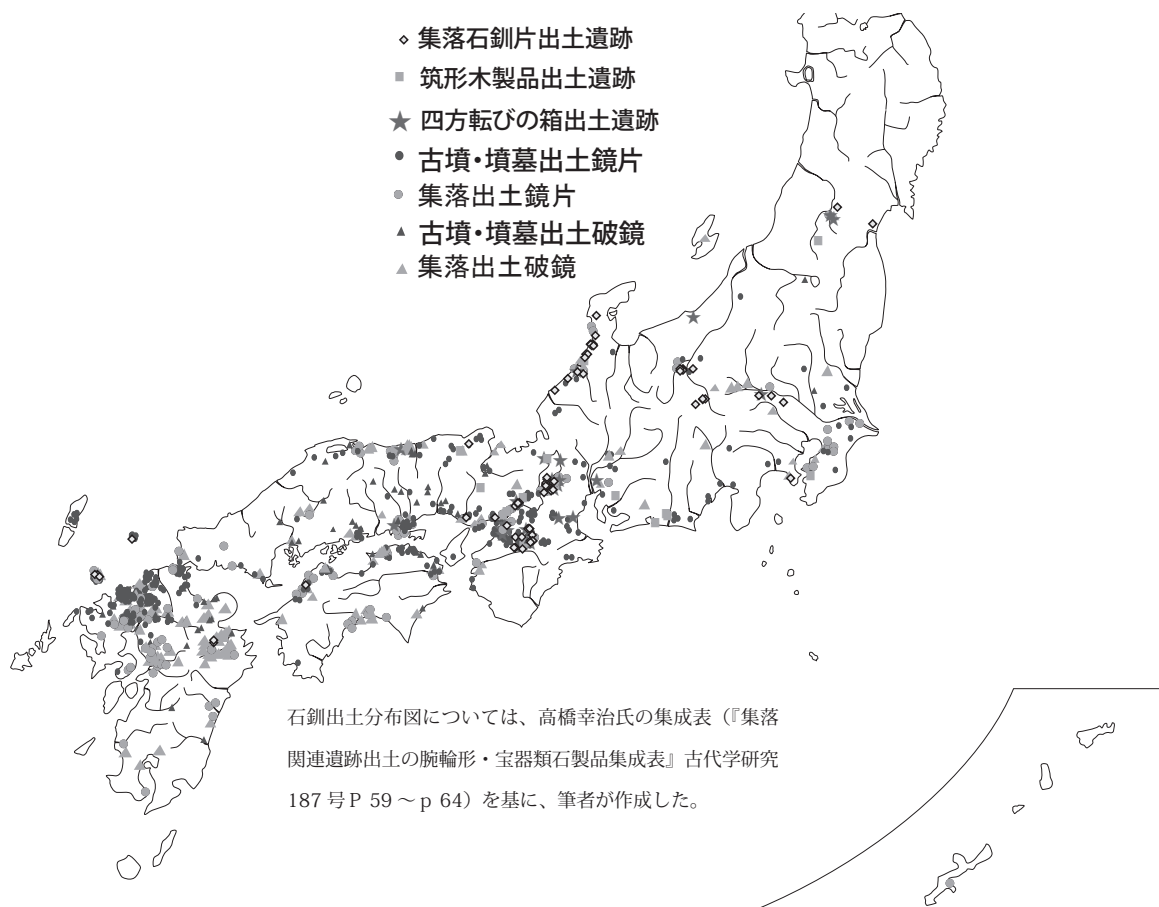


図 14 鏡片・破鏡・四方転びの箱・筑形木製品・石釧 出土分布図

県名	市町村名	遺跡名	鏡式	遺存度・直径	遺跡概要	出土遺構	遺構の年代	銘文	備考
499	徳島県 阿波市	十楽寺山古墳	不明	破片	古墳	竪穴式石室	古墳前期	空欄	現物無し
500	徳島県 徳島市	勢見山古墳	神獸鏡	破片	古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	現物無し
501	徳島県 徳島市	宮谷古墳	三角縁四獣鏡	破片 22.2 cm	古墳	前方部墳丘裾	古墳前期	無し	
502	徳島県 鳴門市	大代古墳	獸形鏡	破片	古墳	箱式石棺	古墳前期	空欄	不明
503	香川県 観音寺市	鹿隈獅子塚古墳	不明	破片	古墳	空欄	古墳前期	銘帯「・□王□・」	
504	香川県 坂出市	遍昭院真山古墳	乳文鏡	破片 9.2 cm	古墳	空欄	古墳前期	銘帯(擬銘帯)	
505	香川県 さぬき市	赤山古墳	不明	破片	古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	現物無し
506	香川県 さぬき市	足行谷古墳群	三角縁神獸鏡	不明	古墳	空欄	古墳	無し	現物無し
507	香川県 さぬき市	不明	不明	破片	古墳?	粘土郭	古墳時代	無し	
508	香川県 さぬき市	龍王山古墳	不明	破片	古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	現物無し 鉄製鏡
509	香川県 高松市	円養寺遺跡 D 地区	不明	破片	墳墓	竪穴式石室	古墳前期	無し	
510	香川県 高松市	猫塚古墳	内行花文鏡	破片	古墳	不明	古墳前期	不明	
511	香川県 高松市	猫塚古墳	神獸鏡	破片	古墳	不明	古墳前期	不明	現物無し
512	香川県 丸亀市	快天山古墳	内行花文鏡	破片 11.6 cm	古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	
513	香川県 丸亀市	毘沙門山古墳	振文鏡	破片 7.2 cm	古墳	空欄	古墳前期	無し	
514	愛媛県 今治市	相の谷 9 号墓	獸形鏡	破片 17 cm	古墳	箱式石棺	古墳前期	無し	
515	愛媛県 今治市	唐子台エ門谷上古墳	不明	破片 14.5 cm	古墳	不明	古墳時代	空欄	
516	愛媛県 今治市	唐子山古墳	不明	破片	古墳	不明	古墳時代	空欄	
517	愛媛県 今治市	久保山古墳	神獸鏡	破片	古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
518	愛媛県 今治市	久保山古墳	不明	破片 9 ~ 11 cm	古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
519	愛媛県 伊予市	広田神社上古墳	三角縁神獸鏡	破片	古墳	不明	古墳前期	無し	
520	愛媛県 伊予市	免渡護古墳	不明	破片 11.3 cm	古墳	横穴式石室	古墳後期	空欄	
521	愛媛県 四国中央市	四ツ手山古墳	鈴鏡	破片 10 cm	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
522	愛媛県 松山市	塔ノ口山古墳	内行花文鏡	破片	古墳	石室?	古墳時代	銘座「長宣子孫」	
523	愛媛県 松山市	塔ノ口山古墳	不明	破片 14.6 cm	古墳	石室?	古墳時代	空欄	
524	愛媛県 松山市	鷹ヶ森 6 号墳	不明	破片 11 cm	古墳	横穴式石室	古墳終末期	空欄	
525	愛媛県 松山市	西野山遺跡	不明	破片	墳墓	土坑薄	弥生V期	空欄	
526	高知県 宿毛市	曾我山古墳	獸形鏡	破片	古墳	磯郭	古墳中期	無し	
527	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	流雲文鏡	破片 17 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	銘帯 判読不能	現物無し
528	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	流雲文四神鏡	破片 15.6 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	銘帯「新有・玄武陰陽」	現物無し
529	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	S 字縁華文四神鏡	破片 14.15 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	銘帯「新」	現物無し
530	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	波文方格規矩鏡	破片 14.1 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	銘帯「飲豊泉麗」	現物無し
531	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	忍冬縁華文方格規矩鏡	破片 14.1 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	有り	現物無し
532	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	獸形規矩四神鏡	破片 14.1 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	銘帯「漢有善・明左」	現物無し
533	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	波文規矩四神鏡	破片 14 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	空欄	現物無し
534	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	菱形文規矩四神鏡	破片 13.8 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	空欄	現物無し
535	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片 13.8 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	空欄	現物無し
536	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片 13.8 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	有り	現物無し
537	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片 13.2 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	有り	現物無し
538	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片 13.2 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	空欄	現物無し
539	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片 12.8 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	空欄	現物無し
540	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片 12.8 cm	墳墓	甕棺	弥生IV期	空欄	現物無し
541	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡 15 号木棺墓	内行花文鏡	破片 15.7 cm	墳墓	木棺墓	弥生後期	銘座「長宣子孫」	
542	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡 16 号木棺墓	内行花文鏡	破片	墳墓	木棺墓	弥生後期	空欄	
543	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡 17 号木棺墓	内行花文鏡	完形 15 cm	墳墓	木棺墓	弥生後期	銘座「長宣子孫」	破砕鏡か
544	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡 1 号木棺墓	内行花文鏡	破片	墳墓	木棺墓	弥生後期	空欄	
545	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡 6 号木棺墓	内行花文鏡	破片	墳墓	木棺墓	弥生後期	空欄	
546	福岡県 糸島市	井原縄溝遺跡 7 号木棺墓	方格規矩鏡	破片	墳墓	木棺墓	弥生後期	空欄	
547	福岡県 糸島市	久米遺跡	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生	空欄	不明
548	福岡県 糸島市	長須隈古墳	鳳鏡	破片	古墳	舟形石棺	古墳中期	銘座「長・」	現物無し
549	福岡県 糸島市	三雲遺跡イフ地区 4 号石棺墓	内行花文鏡	破片	墳墓	箱式石棺	弥生庄内併行期	空欄	
550	福岡県 糸島市	三雲遺跡加賀石地区	方格規矩鏡	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
551	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	重圓彩面鏡	破片 27.3 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
552	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	羽状地文鏡	破片 19.3 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
553	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片 18 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「玄錫・」	
554	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片 18.8 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「・明流・」	
555	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
556	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片 16.4 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
557	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片 16.4 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「白」または「日」	
558	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片 16.4 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「玄錫・」	
559	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「・事君怨・」	
560	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片 17 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「錫而流澤」	
561	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片 18 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「而」	
562	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
563	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
564	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
565	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片 16 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「・疏遠」	
566	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片 16.3 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「而流」	
567	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「之」「之」	
568	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
569	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
570	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
571	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
572	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
573	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
574	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
575	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
576	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
577	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 1 号甕棺墓	不明	破片	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
578	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 2 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片 6.2 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「内・・夫」	
579	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 2 号甕棺墓	重圓銘帯鏡	破片 11.4 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「月」	
580	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 2 号甕棺墓	(「日光」銘鏡系)	破片 7.6 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	空欄	
581	福岡県 糸島市	三雲遺跡南小路地区 2 号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片 7.4 cm	墳墓	甕棺	弥生III期	銘帯「下大」	

県名	市町村名	遺跡名	鏡式	遺存度・直径	遺跡概要	出土遺構	遺構の年代	銘文	備考
678	佐賀県	鳥栖市	平原遺跡 2区 SX222	仿製六弧内行文文鏡	破片 7.4 cm	祭祀	祭祀品集積	古墳中期	無し
679	佐賀県	吉野ヶ里町	三津西遺跡	内行文文鏡	破片 15.4 cm	墳墓	不明	不明	無し
680	佐賀県	吉野ヶ里町	二塚山遺跡 26号土坑墓	内行文文鏡	破片 15.6 cm	墳墓	土坑墓	弥生時代	無し
681	佐賀県	吉野ヶ里町	南角遺跡	内行文文鏡	破片 14.6 cm	墳墓	土坑墓	弥生時代	無し
682	長崎県	壱岐市	掛木古墳	獣帯鏡	破片 15.4 cm	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し
683	長崎県	壱岐市	原の辻遺跡	方格規矩鏡	破片	墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し
684	長崎県	壱岐市	原の辻遺跡	方格規矩鏡	破片	墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し
685	長崎県	壱岐市	原の辻遺跡	不明	破片	墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し
686	長崎県	壱岐市	原の辻遺跡	不明	破片	墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し
687	長崎県	壱岐市	原の辻遺跡	不明	破片	墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し
688	長崎県	壱岐市	原の辻遺跡	不明	破片	墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し
689	長崎県	壱岐市	原の辻遺跡	不明	破片	墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し
690	長崎県	壱岐市	原の辻遺跡	神獸鏡	破片 11.2 cm	墳墓・集落	甕棺	弥生時代	路帯 「□居右□」
691	長崎県	壱岐市	鶴田遺跡	不明	破片	墳墓・集落	不明	弥生時代	空欄
692	長崎県	雲仙市	遠見塚遺跡 1号石棺	仿製内行文文鏡	破片 8.3 cm	墳墓	箱式石棺	古墳中期	不明
693	長崎県	佐世保市	岩谷1遺跡 1区	内行文文鏡	破片 9.8 cm	墳墓	不明	不明	無し
694	長崎県	対馬市	木坂遺跡 5号石棺	弥生小型仿製鏡	破片 9.7 cm	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	無し
695	長崎県	対馬市	下ガヤノキ遺跡 F地点	内行文文鏡	破片 17.7 cm	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	路帯 「行心伝而」
696	長崎県	対馬市	下ガヤノキ遺跡 F地点	不明	破片 9.2 cm	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し
697	長崎県	対馬市	下ガヤノキ遺跡 G地点 北方	獣帯鏡	破片	墳墓	箱式石棺	古墳後期	無し
698	長崎県	平戸市	田助遺跡	内行文文鏡	破片	墳墓	箱式石棺	古墳時代	無し
699	長崎県	松浦市	短ノ木遺跡 2号石組	内行文文鏡	破片 10.4 cm	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し
700	熊本県	大牟田市	表の鼻 28号 板石積石室墓	不明	破片	墳墓	板石積石室墓	古墳中期	空欄
701	熊本県	山鹿市	古閑白石遺跡	仿製内行文文鏡	破片	墳墓	箱式石棺	弥生時代	無し
702	熊本県	山鹿市	方保田東原遺跡 2号石棺	不明	破片	墳墓	箱式石棺	古墳中期	空欄
703	熊本県	熊本市	新御堂遺跡	昭明鏡	破片	墳墓・墳墓	不明	弥生	空欄
704	大分県	宇佐市	大平石棺群 大平3号石棺	三角縁神獸鏡	破片 23.8 cm	墳墓	箱式石棺	古墳時代	空欄
705	大分県	臼杵市	白塚古墳	不明	破片	古墳	舟形石棺	古墳中期	空欄
706	大分県	大分市	猫塚古墳	平縁式六獣鏡	破片 17 cm	古墳	箱式石棺	古墳前期	空欄
707	大分県	大分市	猫塚古墳	鳥獸文鏡	破片 17 cm	古墳	箱式石棺	古墳前期	路帯 「・・羊・・」
708	大分県	日田市	徳瀬遺跡 B区石棺墓	位至三公鏡	破片 7.8 cm	墳墓	墳丘ない墓	古墳前期	空欄
709	宮崎県	串間市	銭塚塚	不明	破片 5 cm	古墳	平石積石郭	古墳後期	不明
710	宮崎県	新富町	伝 新田原 45号墳	乳文鏡	破片 7.4 cm	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し
711	宮崎県	宮崎市	連ヶ池 46号横穴墓	不明	破片 8 cm	横穴	不明	古墳後期	無し
712	宮崎県	宮崎市	連ヶ池 52号横穴墓	不明	破片 7 cm	横穴	不明	古墳後期	無し
713	鹿児島県	指宿市	橋牟礼川遺跡	不明	破片	集落・墳墓	不明	古墳時代	空欄
714	鹿児島県	長島町	白金崎古墳	不明	破片	古墳	横穴式石室	古墳後期	空欄
715	沖縄県	浦添市	浦添跡跡コーグスク地区	方格規矩鏡	破片 9.8 cm	グスク	包含層	14世紀頃	空欄
716	千葉県	神崎町	不明	不明	破片 8.69 cm	不明	不明	不明	無し
717	神奈川県	不明	伝神奈川県	位至三公鏡	破片 4.7 cm	不明	不明	不明	無し
718	岐阜県	可児市	伝可児町西宮之洞	仿製内行文文鏡	破片	不明	不明	不明	無し
719	三重県	大牟田市	伝紀勢町	不明	破片 9.6 cm	不明	不明	不明	無し
720	京都府	八幡市	伝八幡町	画文帯神獸鏡	破片 18.9 cm	不明	不明	古墳時代	無し
721	兵庫県	洲本市	鳥飼	唐草文鏡	破片 8.9 cm	不明	不明	古墳時代	無し
722	兵庫県	姫路市	手納山	不明	破片	不明	不明	弥生時代	空欄
723	兵庫県	姫路市	手納山	内行文文鏡	破片	不明	不明	弥生時代	空欄
724	兵庫県	南あわじ市	戒壇寺	不明	破片	不明	不明	空欄	現物無し
725	奈良県	奈良市	伝奈良県	画文帯神獸鏡	破片	不明	不明	不明	無し
726	鳥取県	松江市	鳥越山遺跡	不明	破片	不明	不明	空欄	現物無し
727	岡山県	瀬戸内市	不明	仿製内行文文鏡	破片	不明	不明	不明	無し
728	徳島県	石井町	城ノ内丸山古墳	内行文文鏡	破片	不明	不明	古墳時代	無し
729	香川県	善通寺市	不明	不明	破片	不明	不明	空欄	無し
730	福岡県	飯塚市	伝 飯塚市	半円形獣帯鏡	破片 13.4 cm	不明	不明	不明	「宜子・・」
731	福岡県	飯塚市	伝 飯塚市	半円形獣帯鏡	破片 13.4 cm	不明	不明	不明	路帯 「・・宜子・・」
732	福岡県	糸島市	一の町遺跡	方格四神鏡	破片	不明	不明	弥生中～後期	「順」
733	福岡県	糸島市	三雲遺跡上覚地区	不明	破片	不明	不明	不明	不明
734	福岡県	うきは市	塚堂古墳後内部分封土	弥生小型仿製鏡	破片 5.2 cm	不明	不明	不明	空欄
735	福岡県	うきは市	塚堂古墳後内部分封土	弥生小型仿製鏡	破片 6.1 cm	不明	不明	不明	空欄
736	福岡県	うきは市	不明	不明	破片 20.7 cm	不明	不明	不明	空欄
737	福岡県	春日市	伝 昇町遺跡	内行文文鏡	破片 12.9 cm	不明	不明	不明	不明
738	福岡県	田主丸町	不明	内行文文鏡	破片 7.3 cm	不明	不明	不明	不明
739	福岡県	福津市	伝 大字宮地獄付近	鳳鏡	破片 18 cm	不明	不明	不明	無し
740	佐賀県	神埼市	北外遺跡	内行文文鏡?	破片 20 cm	不明	不明	不明	不明
741	佐賀県	佐賀市	伝 大和町大字池上	不明	破片 17.4 cm	不明	不明	不明	路帯 「□□」
742	佐賀県	武雄市	六ノ角遺跡	半龍文鏡	破片 6.4 cm	不明	不明	弥生時代	無し
743	長崎県	対馬市	深人遺跡	不明	破片	不明	不明	弥生時代	無し
744	熊本県	山都町	枯木原遺跡	方格規矩鏡	破片 14.5 cm	不明	不明	不明	無し
745	熊本県	芦北郡	伝 芦北郡	三角縁高方作路二神二 獣鏡	破片	不明	不明	不明	路帯 「悉皆右長保・」
746	熊本県	宇土市	藤貝塚	不明	破片 11 cm	不明	不明	不明	空欄
747	熊本県	山鹿市	方保田遺跡	中国鏡	破片 17 cm	不明	不明	不明	不明
748	大分県	大分市	東大道遺跡	不明	破片	不明	不明	弥生時代	不明
749	宮崎県	高鍋町	持田古墳群	不明	破片	不明	不明	不明	無し
750	宮崎県	宮崎市	下那珂町遺跡	半龍文鏡	破片 10 cm	不明	不明	弥生後期	不明

破鏡・鏡片集成は、『最北の破鏡』-鏡片分布から見た古墳出現期の動態(予察)-財団法人山形県埋蔵文化財センター研究紀要創刊号 2003に掲載した
 集成表に、2014年1月現在までのデータを加え、若干の加除訂正を行ったものである。その際、市町村名は平成の大合併後の市町村名に統一した。